荒尾市立府本小学校　校長便り　№90

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年4月17日(金)

徒然

新年度がスタートして2週間ほど子ども達を眺めますと、学年が一つ上がっただけなのに、自覚が言動に現れているような気がします。特に6年生にはそれが顕著です。

始業式、入学式等々、行事のラッシュで、子ども達も私達も、暫くの間は慌ただしく過ごしました。6年生には多くの行事で先頭に立ち、活動をしてもらわなければなりません。その中で経験を積むことによって更に成長していきます。時間の経過と自身の置かれた立場が人を成長させていくのです。他の学年も一つ学年が上がったという自覚を持ち活動していて、とても頼もしく思います。今年も、どんな活躍を見せてくれるのか楽しみです。

【雑感】内面を磨けば外面も光る

皆さん、「エンツォ・フェラーリ」という車を知っていますか。フェラーリと言えばだれでも知っていると思いますが、一応聞いてみました。フェラーリという自動車メーカーがイタリアにあって、その創始者の名前がエンツォ・フェラーリなのですが、その創始者の名前が車の名前になっているのです。ということはこの車にはメーカーとしての並々ならぬ強い思いが込められていることは容易の想像できます。エンツォ・フェラーリは、創業55周年を記念する限定生産車の名前であり、同時にフェラーリの創業者の名前でもあります。創業者の名前を冠し、記念碑的な意味合いを持つこの「エンツォ・フェラーリ」は、ある意味でフェラーリ全車種の中で最も重要な車と言えるかもしれません。限定生産車ということで、当初349台が生産され、その後追加生産で50台、合計で399台のエンツォ・フェラーリが世に送り出されました。ちなみに新車購入価格は、日本円でおよそ8000万円程でしたが、当然ながらその希少性は極めて高く、1億円を超える価格で取引されることもあったようです。いずれにしても、超希少かつフェラーリにとって超重要な意味をもつ「エンツォ・フェラーリ」ですが、なんと日本人のデザイナーがデザインしたものなのです。その名は奥山清行、海外では「Kan Okuyama」として活躍されています。奥山氏のデザイナーとしての考え方は子育てや教育等、人を育てる仕事と重要な部分が多いです。

奥山氏のデザインの基本は、機能性（性能）をとことん追求していくと、それは美しさとして形に現れてくるというものです。車のデザインをするに当たり、美しさだけを追い求めることはできるけれど、それは外面だけであってすぐに剥がれてしまう、だからこそ、車を運転する人が喜びを感じられるような機能性を考える。すると結果的に形としての「美」にたどり着くというのです。なるほど、納得です。さて、この機能性を人間の内面として考えてみましょう。内面、即ち心と考えると、容易に理解できるのではないですか。心をとことん磨けば外面、人の立ち居振る舞いや他人への優しさなど、外に現れる部分も光るのではないでしょうか。そして逆も真なりで、どんなに外面を取り繕っても内面が成長していなければ外のメッキはすぐに剥がれるということです。私たちは人間として内面を磨くことに重きをおいていきたいものです。

内面を磨くということ、その要素としてどのようなものがあるのでしょうか？　優しさ、慈しみ、勇気、夢、感謝、主体性・協働性、強い体、学力…、挙げれば限りがありませんね。だんらんの話題として如何でしょう。

シリーズ「自分を語る」#90

気持ちの整理がついた私は、8名の教え子達と多くの経験を積み、掛け替えのない時間を過ごしました。8月は研修員受入式の後、日本語研修が大きな事業でしたが、1か月日本語研修を受けたからといって、そう簡単に日本語をマスターできるはずはありません。ましてや、南米の研修員は日本語がある程度できますので、私も日本語の方が楽でしたからある程度仕方の無いこととして、コミュニケーションは基本的に日本語、熊本弁で行うことにしました。

日本語研修のさなか、「火の国祭り」にも参加しました。当時（今もかもしれません）、“県庁連”として、火の国祭りに参加していました。8名の教え子達と私、そして通訳さんやCIR（国際交流のコーディネーター）も参加して、正に多国籍澤田組でした。チョンマゲのかつらを被る子、法被姿の子、浴衣姿の子、様々に、“サンバおてもやん”のリズムに乗って、とても楽しそうでした。正に熊本の蒸し暑い夏を大騒ぎして過ごしました。研修員、留学生は日本ならではの雰囲気を味わい、「トテモタノシカッタデス。」と口を合わせていました。

8月は、学校現場では夏休みですが、私にとってこの年の夏は休みどころか、最も忙しく充実した夏でした。教え子達がどうしたら楽しく充実した研修を行い、熊本での時間を心に刻めるのか、そんなことを考えながら密な付き合いをした時間でした。とは言え、留学生を除く6名の研修員は日本語研修で忙しく、研修が終われば、実研修に入るため、私自身も研修先との調整に忙しく、バタバタと過ぎた8月でもありました。

8月末、タイの研修員を玉名市にある「れんげ農園」に送り届けます。宿泊施設は農園内にある、いわゆる寄宿舎です。研修開始時の人員は2名で、ロンさんと日本の若者でした。ロンさんは人懐っこい性格でしたので、すぐに打ち解け、楽しそうに研修を開始しました。更に、カンボジアの研修員キンさんを菊北町役場へとお連れし、挨拶を済ませ、研修先である湯浦小学校を視察しました。キンさんは来日直後、最もカルチャーショックを受けていた研修員で、日本の生活に慣れるまで少々時間が掛かりましたが、湯浦小学校の環境は何となくカンボジアのそれと重なるようで、安心して研修を開始することができたようです。

さて、他の研修員は…。当然、最初の宿舎から研修先へ通勤することになります。宿舎は熊本市の渡鹿にあったので、通勤が最も大変だったのは中国の研修員の劉さんでした。しかし、彼女は頑張り屋さんでしたね。毎日、雨の日も風の日も自転車で渡鹿から機能病院まで通いました。他の研修員も全員自転車での通勤でした。時間や移動の自由も効くため、その選択となったのでしょう。

9月1日、それぞれの研修開始です。私は、研修先への挨拶と視察の行脚が始まります。それに並行して、九州内での他県研修や県内研修も企画しなければなりません。九州には学びの多い場所が沢山あります。水俣病に関すること、平和に関すること…、世界の人々が注目している場所が沢山あるのです。それを私には伝える義務があると感じていました。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）